



『煌夜祭』特別書き下ろし短篇

「言わぬが花」

多崎 礼



それは今から数年前、冬至の日のことだった。

ムジカは先を急いでいた。といつても煌夜祭に向かっていたわけじゃない。この地に骨を埋める覚悟でいたから、漂泊の語り部に戻る気はなかった。形見の仮面も友人に譲った。それにしてもひどい天気だった。北からの強風、雪交じりの雨も降っている。あつという間にずぶ濡れになった。身体が芯まで冷えてしまった。それでもムジカは足を止めなかった。

夜が来る前に到着したい。近道をしようと森に入った。魔女が棲むといわれるターレンの森だ。魔女はもういないのに「魔女に会った」という者が絶えない。誰もが踏み入ることを躊躇する魔の森だ。しかしムジカにとっては庭のようなもの。迷うはずがない。迷うはずがなかった。

だが迷った。行けども行けども森が切れない。木々の合間には霧が立ちこめている。日没までにはまだ間があるはずなのに、あたりはすっかり薄暗い。

「こんな坂、あったか？」

はやきながら坂道を下っていくと、前方から水音が響いてきた。清水が岩場を流れ落ちていく。大岩の影に泉が湧いている。水面からはもうもうと湯気が立っている。ムジカは足を止め、泉を覗き込んだ。

なんだこれは？ お湯が湧いているのか？

「おや、客人とは珍しい」

湯気の向こうから不思議な音色の聲がした。見れば泉のほとりに女がいる。岩に腰掛け、温水に足をつけている。白髪交じりの短い髪、木の葉のような緑の瞳、目の下には隈がある。

これ幸いとムジカは尋ねた。

「すみません。道に迷ってしまつて。ここはどのあたりですか？」

「ここはハザマだ」

女は坂の上を指差し「そっちがシガンで」今度は坂下を指差した。「あっちがヒガンだ」ムジカは顔をしかめた。ここはターレンの森のはず。なのに知った地名がひとつもない。さてはこの女、俺をからかつていやがるな？

「せっかく来たんだ。一緒に飲もう」

女が酒を勧めてくる。赤くて平たい変わった形の杯を差し出す。

ムジカは邪険に手を振った。

「酒はいいから教えてくれ。ディテル方面に出るにはどっちに行けばいい？」

「教えてやってもいいが、ただでは教えられんな」

「今、持ち合わせがないんだ」

「ならば、なにか話を聞かせてくれ」

ムジカは目を眇めた。話を乞うということは、この女、魔物か？

それにしても立ちすぎている。顔にも陰がありすぎる。とはいえムジカもすべての魔物を知っているわけではない。中には美しくない魔物だっているのかもしれない。油断は禁物だ。逃げようとして喰われたら目も当てられない。

「わかった」

気は急ぐが、仕方がない。ムジカは岩に腰掛けた。

「どんな話が聞きたい？」

「お前さんの話がいい。なぜ急いでいるのか話してくれ」

「面白い話じゃないぞ？」

「かまわん」女はべろりと唇を舐めた。「なにやら騒動の臭いがする。私は揉め事を解決するのが三度の飯より好きなんだ」

変な魔物だ。

「ならば話そう」

ムジカは早口に切り出した。

この土地に流れ着いて十年。俺はこんな見た目だからな。最初は化け物と揶揄された。しかしキノコを使って土を洗ったり、薬草を煎じたり、ちよつとした怪我の手当てなんか

をしてやったりしているうちに、何かと頼られるようになった。その噂がダイテルまで響いたらしくて、パトシユ様のお屋敷に招かれたんだ。

「ご当主は戦傷が思わしくなくて、自分はもう長くないと覚悟をしていた。俺を呼びつけたのは自分のためでなく彼の娘のためだった。愛する妻の忘れ形見、末娘のアラナの行く末を見届けるまでは死んでも死にきれないと言った。

「俺は少しばかり薬草に詳しいだけです。医師ではないので病気は治せません」

そう言ったんだが聞き入れて貰えなくてね。「会うだけでもいいから」と押し切られてしまった。

アラナは黒髪に青い目をした美しい令嬢だった。だが生まれつき体が弱く、日の光に当たると肌が赤く腫れ上がってしまうという。パトシユ家は島主の傍系、アラナもほんのわずかだけれど島主ターレンの血を引いている……と聞けば、嫌な予感しかなかったらう？え、何のことかわからない？とほげやがって。

魔物だよ、魔物。

物語に飢えていて、満たされなければ冬至の夜、悪鬼に姿を変えて人を喰らう。アラナの特徴はまさに魔物のそれだった。

魔物は厄災の前に生まれる。彼女には二人の兄がいて、しかもかなり折り合いが悪かった。もしご当主が身罷られたら、跡目争いが勃発するのは火を見るよりも明らかだった。

アラナはまだ人間だが、これから魔物に変化するかもしれない。注意する必要があると思つた。だからご当主の許可を得て、たびたびアラナに薬湯を届けた。ついでに読み書きを教え、計算を教え、たくさんのお話を話して聞かせた。彼女は頭が良くて好奇心旺盛だつた。とりわけ魔物達の話が好き、「私って魔物みたいよね」と言つて笑つていた。

そのアラナが昨夜からひどく苦しんでいるという。魔物に詳しい貴方に診て貰いたいという伝言を受け取つて、俺は焦つた。人が魔物に変化するのは十三歳の時だと聞いていた。アラナは今年で十二歳。まだ一年あると思つて油断していたんだ。

魔物の話はいくつも知つている。魔物に会つたこともある。だが人が魔物になる瞬間に立ち会つたことはない。夜通し話を聞かせることで、はたして変化を止められるだろうか。駄目で元々、やつてみるしかない。いざとなればこの身を喰わせてやればいい。

そう思つて、俺は取るものも取りあえずパトシユ家があるディテルに向かつた。結果、道に迷つてここにいる。

ムジカはパシン！と膝を打つた。

「さあ、全部話したぞ。道を教えてくれ」

「これはなかなか興味深い」

にんまりと笑つて女は身を乗り出した。

「アラナの兄はどういう人物だ？」

「アラナとは年が離れているので二人ともすでに成人している。長兄の名はザキ。秀才で知識も豊富、内政面で父の補佐をしている。次兄はオドム。勇猛果敢で度胸もいい。守りの要である自警団を父の代わりに指揮している。どちらも人気者で取り巻きも多い。しかし性格は水と油、兄弟仲は最悪だ」

「では兄弟と妹の仲はどんな感じだ？やはり険悪か？」

「いいや、ザキもオドムも妹を溺愛している。どこの馬の骨かもわからない俺にアラナがやたら懐いたんで、最初はかなり冷たくあしらわれた。けれど彼女に勉強を教えるようになってからは、むしろ感謝されるようになった。『女に教育は必要ない』と叱られることはあつても、礼を言われることは滅多にないからな。そういう点からしても、なかなか良く出来た青年達だ」

「先程、お前さんも言つていたな。アラナは頭が良くて好奇心旺盛だと」

「ああ」

「ザキとオドムはどうだ？妹のことをどう思っている？」

「性格真逆な兄弟だが、ことアラナに関してはまったく同じことを言つていた。『アラナは賢い。優しくて視野が広い。なにより弱者の立場がわかつてる。アラナが男でないことが返す返すも残念でならない』と」

真剣に妹の身を案じていたザキとオドムを思い出し、ムジカは気が重くなった。

「二人の覚悟が知りたくて『もしアラナが魔物になったらどうする』と尋ねたことがある。ザキは答えた。『この屋敷の中で不自由のない暮らしをさせる。冬至の夜にはアラナのために語り部を集める。毎日話をして決して飢えさせない。絶対に苦しませない』と」

「なるほど、優しい長兄だな」

「オドムは言った。『魔物になれば病に苦しむこともなくなる。この土地に縛られる必要もなくなる。アラナは物語が大好きだからきつと立派な語り部になる。漂泊の語り部になって幸せに生きてくれればそれでいい』と」

「なるほどなるほど、次兄もなかなかいい男じゃないか」

感心したように頷いて、女は空の杯でムジカを指した。

「お前さん、それと同じ質問をアラナにもしただろう？ 彼女はなんと答えた？」

「ターレン島が好きだから離れたくない。でも屋敷に閉じ込められるのは嫌だ——と」

「う……」

女が呻いた。何かを堪えるかのように俯いた。

かと思うと——

「うあつはつはあ……！」

大口を開けて大笑した。杯で膝を打ち、湯を跳ね上げてゲラゲラと笑う。

「その娘、なかなかの策士だな！」

「笑いごとじゃない！」

ムジカは眉を逆立てた。

「いいから早く道を教えろ！」

「いやいや、急がなくても大丈夫」

ひくひくと笑って女は答える。

「お前さんの出番はない。少なくとも今年はな」

「どういう意味だ？」

「ザキもオドムもお前さんも、アラナに一杯喰わされたんだよ。ヤオヨロズノカミに問うまでもない。お前さんさえ戻れば万事解決だ」

「は？」

「早く帰れ。でないとせっかくの大団円に疵がつく」

女はシッシツと手を振った。

何だその態度は。頭にきた。言い返してやろうと前に出かかった時——

ムジカは目覚めた。

パトシユ家の客室で寝ていた。聞くところによると道の途中で倒れていたらしい。体温

を奪われると人は意識が混濁する。あり得ない幻覚を見たりする。

ということは、俺は幻を見たのだろうか？

いや、そんなはずはない。

ムジカはもう一度、あの女のことを思い出そうとした。だが、思い返している暇はなかった。

「ごめんなさああい!!」

アラナがムジカに飛びついた。そして泣きながら謝罪した。

「みんな私のせいなの。私がウソをついたせいなの」

こんなことになると思わなかった。先生を巻き込んでしまうとは思わなかった。先生が死ななくてよかった。ごめんなさい、ごめんなさい。

「申し訳ない」

「すまなかった」

ザキとオドムも謝った。自分達がいけなかったと。自分達の責任だと。

つまり、こういうことだった。

冬至の夜、アラナは魔物になりかけた。人を喰いたいと懇願した。二人の兄は愛する妹を救うため、自らを差し出そうとした。

「兄者は下がっている！俺が喰われる！」

「いや、下がるのはお前だ。アラナには私を食べて貰う！」

「俺のほうが身体が大きくて食べがいがある！」

「私のほうが身体が柔らかくて食べやすい！」

「兄者は長男だ。家督を継ぐ義務がある！」

「お前は次男だが家督を継ぐ度量がある！」

「兄者は賢くて、細かなことにもよく気がついて、女にモテる！」

「お前は勇敢で、曲がったことが大嫌いで、男にもモテる！」

「え？」

「ええっ?」

「俺はずっと、優秀な兄者が羨ましかった」

「私も同じだ。いつも友人達に囲まれているお前が妬ましかった」

「かなわないのが悔しくて、意地を張っていた」

「情けない自分を認めたくなくて、意固地になっていた」

「仲間達に煽られて、後に引けなくなっていた」

「側近達にそそのかされて、お前を邪険に扱った」

「すまなかった兄者」

「私こそ大人げなかった」

「どうか許してくれ」

「どうか許してくれ」

ザキとオドムは互いの肩を抱き合った。相手の強さを素直に認め、自分の弱さを余さず吐露し、後悔と懺悔の涙を流した。

「ああ、よかった。本当によかった！」

いつの間にか、アラナも一緒になって泣いていた。

「もう喧嘩しちゃ駄目だからね。お兄ちゃん達は違うからこそカッコいいんだからね。お互いの強さを活かしあつて、お互いの弱さを補いあつたら、お兄ちゃん達は向かうところ敵なしなんだからね」

二人は啞然として妹を見た。肌は黒くなっていない。鉤爪も生えてもいない。いつも通りの可愛いアラナだ。そこで兄達はようやくやく悟った。すべて演技だったのだと。反目し合う兄達を和解させるため、妹が一芝居打ったのだと。

それを聞いて、ムジカは笑った。

演技だとは知らず、慌てた兄達は魔物に詳しい俺を呼んだ。そのせいで俺が死にかけたもんだから、アラナはびっくりして平謝りに謝って、ずっと泣き続けているのだ。アラナが一芝居打ったのは素直になれない兄達を仲直りさせるため。遠回りに言えば、俺が死にかけたのはザキとオドムの諍いのせいなのだ。だから兄達は妹を叱ることも出来ず、神妙

な面持ちで俺のことを見守っているのだ。

可笑しくて、胸の中が温かくなって、ムジカはクスクスと笑った。

「アラナ、もう泣かなくていい。ザキもオドムも心配するな。俺は死んでいないし、怒ってもいい」

二人の兄がいがみ合いを続けければ、跡目争いになるのは目に見えていた。だがアラナはそれを阻止した。起こるはずだった災禍を見事に回避してみせた。

ああ、なんて子だろう。まったくとんでもない逸材じゃないか。

「アラナ、君は賢い。賢いリイナと同じくらい賢い」

なかば本気、なかば冗談のつもりで言った。

「君はいい為政者になるよ」

知つての通り、ターレン島には島主がない。代わりに島を守っているのがパトシユ家だ。長兄のザキは島民が飢えることのないよう、内政を取りしきっている。次兄のオドムは自警団の先頭に立ち、外交を取りしきっている。二人の兄に助けられ、アラナはパトシユ家の当主として愛するターレン島の復興に全身全霊を傾けている。この三人のおかげでターレン島は貧しいながらも平和な日々を維持している。

ということ、俺の話はこれでおしまいだ。

え？結局アラナは魔物に変化したのかって？

それは言わぬが花というやつだ。人か魔物か、男か女か。そんなもの、どうだっていいじゃないか。アラナは優れた為政者になった。語るべきはそれだけだ。

いや、違うか。もうひとつあった。

あの後、幾度となく森に入ってみたけれど、坂もなければ岩場もない。清流も湯が湧く泉も見当たらなかった。あれは夢だったのか。凍えかけた人間が見た幻だったのか。わかない。けれどあの女はどこかに実在している。そんな気がするんだ。

きつとまた会える。

その時には、名前ぐらい聞いてやってもいいかな。

